
【番外編】 夢か?前世か!?転生か?!あ、憑依か♪

ウッキー君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【番外編】 夢か？前世か！？転生か？！あ、憑依か♪

【Nコード】

N6402R

【作者名】

ウッキー君

【あらすじ】

夢か？前世か！？転生か？！の番外編です。よかったら読んでください^^

第0話

ここは、とある空間。普段では決して人間が踏み込めるような区域はしりかではない。しかし、そこには少なくとも20歳よりは若い少年が一人ポツンと立っていた。

その少年の外的特徴といえば、日本人・ルックスはGood・身長も平均よりは上。内的特徴は、IQは高く300近く・そして記憶喪失。

そんな少々変わった少年がここにいる理由は・・・

刹那

「はい。今回は作者アホに特別枠をもらったので【番外編】をお送りしますので、名も無き謎の少年をNARUTOの世界に主人公うずまきナルトに憑依させちゃいます。」

・・・・・・オイ!!

第1話

ここは何処？オレは誰？そして、この現状は何？

今、名も無き謎の少年が陥っている状況は——既に赤子になっていて、しかも自我がある。そして、禍々しい雰囲気と威圧感を持った九つの尾をもった馬鹿でかい化け狐が目の前に存在している。すると、赤子の少年の隣から2人の声が聞こえてきた。

金髪の男

「ごめんね、ナルト。でも僕らはお前が憎くて君に重り・・・九尾を封印するんじゃないんだ。」

・・・九尾ってあの化け物か？

赤髪の女

「大丈夫よ、ミナト。私達の子供なんだから、きつと強く育つてくれる。」

・・・子供？ってオレが？

金髪の男（ミナトと呼ばれた男）

「そうだね、クシナ。・・・じゃあ、行くよ！・・・・・・・・・・クシナ愛してるよ。」

すると赤髪の女（クシナと呼ばれた女）は、ポツと頬も赤らめた。

赤髪の女（クシナと呼ばれた女）

「あ、あ、あな、あなたってば……。最期まで……。」

こりゃバカップルだ。と思ったのは、オレだけじゃないと思う。それからは、会話は無くなり両親と思われる2人の後姿からは真剣な雰囲気はひしひしと伝わってきた。その後、2人が同時に何かを叫ぶと自分の中に何かが入ってきた気持ちの悪い感覚とそれに伴う激痛が小さな体中に走り回り気を失った……。

???

「起きるのじゃ……。起きるのじゃ。」

そう誰かに肩を揺さぶられオレは目を覚ました。すると、オレの視界に入っただのは超絶世の美女と言い切って良いほどの女性だった。

オレ

「……誰？」

???

「わらわか？わらわは……。わらわは九尾の狐じゃ。」

オレ

「でも・・・、人。」

自称・九尾の狐

「それは、わらわにも分からんのじゃ。それにここは何処なのじゃ？」

オレ達が居たのは、見渡す限り真っ白な空間。

オレ

「さあ・・・。」

と、言つて今まで座つていたから立つてその場を確認しようとしてみると身長が伸びていた。いや、正確に言つて戻っていたのだが。

オレ

「あれ？たしかオレつて赤ちゃんだったような・・・？あ、もしかして君。金髪の男の人と赤髪の女の人に見覚えは無い？」

すると、しばらく考えたようだったが、

自称・九尾の狐

「すまぬ。よく覚えてはおらぬ。・・・ところで、そなた。名は何と言つ？」

オレ

「オレ？オレもよく覚えてはないんだけど、親っぽい人には『ナルト』って呼ばれてた。君は？」

自称・九尾の狐

「わらわは狐だから名前を持つてはおらぬ。付けてはくれぬか？」

オレ

「いいよ。うん・・・『楓』は？」

という事で、オレの名は『ナルト』。彼女は『楓』と名乗ることになった。

主要キャラクター紹介

（原作開始時）

憑依先

・うずまきナルト

今回の主人公である『名も無き謎の少年』の憑依先となつた体と名前。

容姿は、本家本元のうずまきナルトよりも波風ミナトよりで頬の左右両方にある

3本のヒゲもない。身長は156・1？と原作よりも約10？高い。

精神に入っているのは、記憶の一部を失った『名も泣き謎の少年』で、

そのため本家の口癖である「うってばよ」を使わず、口調も優しくなっている。

性格も変わっており、馬鹿でもなく落ちこぼれでもない。逆に天才に近い。

IQ300ということもあり頭の回転はかなり速いが、恋愛沙汰には疎い。

相棒

・楓

九尾の妖狐の人の姿であり、超絶世の美女。身長は171？、スリーサイズは

B ↓ 1 0 1 ? (I c u p) W ↓ 6 1 ? H ↓ 9 1 。 容

姿というか顔やその他のパーツは、

某蛇姫、海賊女帝ボア・ハンコックに激似である。見た目は20代前半。

現在は九尾そのものの力無く、一部記憶も無いが、自分が九尾の妖狐という

記憶だけが残っている。そして、うずまきナルトに思いを寄せているらしいが、

ナルトが気付いているかはとても怪しいところである。

・九尾の妖狐

楓の本来の姿。邪心と陰のチャクラは抜き取られ、精神は楓として一人歩きしている。

陽のチャクラを含む九尾としての力は、現在うずまきナルトに封印されている。

第2話

ナルト

「ところで楓。さっきから声が聞こえない？」

楓

「そうか？いや、わらわには・・・。」

ナルト

「そっか。でも『ナルト・・・ナルト・・・』ってオレ呼ばれてる気がするんだ。だから、一旦行ってくるね。」

すると、楓は一瞬寂しそうな表情を浮かべたが、直ぐにその表情は元に戻り、

楓

「直ぐに戻って来るのじゃぞ。」

というと、オレの視界は急に現実世界らしき場所に戻ってきた。それに伴い体も赤ちゃんの姿に直って？いた。すると、そこにはオレの名前を呼んでいるお爺さんとその左右に1名ずつ仮面を被り黒いマントを羽織った人が居た。

右側の黒マントに仮面の者

「三代目。その子ですか、先生とクシナさんのお子さんは・・・。」

お爺さん

「そっじゃ・・・名は、ナルトというらしい。自来也からもらっ

たそうじゃ。」

左側の黒マントに仮面の者

「四代目は、自分の子を九尾の人柱力に……。」

と、オレの頭上ではそんな会話がなされていた。ここまでで理解できた事は、どうやら九尾——楓はオレの中に封印？されていくらしい事。そして、それは常識的には喜ばしくない事の2点だった。

三代目と呼ばれたお爺さん

「このナルトの出生に関しては、他言無用で頼む。こやつがミナトの子であると知れ渡ったら、他里の忍や国が黙ってはおらんだろう。そして、この子はワシが責任を持って預かる。」

左側の黒マントに仮面の者

「しかし、それではナルト君は、九尾の人柱力としてしか見られなくなり迫害されるのでは……。」

そういう声色は、心配に満ちていた。

三代目と呼ばれたお爺さん

「……四代目火影、波風ミナトはナルトの事を九尾から里を守った英雄として遺して逝ったのじゃ。それが分からない里人ではなからう。そうは思わんか？銀狼。」

銀狼（右側の黒マントに仮面の者）

「はい。」

三代目と呼ばれたお爺さん

「蒼龍。銀狼もそう言っているだろう。・・・そんなに危惧することはない。」

蒼龍（左側の黒マントに仮面の者）

「そうですね。」

それから、オレの傍に倒れているミナトと呼ばれる父親とクシナと呼ばれる母親の遺体と共に、オレは運ばれる感覚を感じながら意識が薄れていくのであった。

三代目の楽観的、希望的な甘い思考はその数年後、過ちだったと思わされるのであった。つまり、蒼龍と呼ばれていた黒マントに仮面の者の悪い考えの方が当たってしまったのである。それは、大々的に行われるのではなく極々地味にバレない様に・・・・・・。

第3話

それからと言うもの流石に小さいときは無かったが、段々と大きく
なっていくにつれて外出をする機会も増えていき、それに伴い里の
大人達からの冷ややかな視線や子供達からの程度の低いイジメ的な
行為を受ける回数も増えていった。しかし、それは隣に三代目火影
—— 爺ちゃんがいる時には絶対にしてこないというかなり外道な
ものだった。しかも、それは日に日に度合いが激しくなっていく。

ナルト

「ねえ、爺ちゃん。」

三代目

「ん？なんじゃ。」

ナルト

「この間、本で教えてくれたチャクラの使い方教えて。将来、“爺
ちゃんみたいな”忍者になりたいから。」

この一言で、バツチリ爺ちゃんの心を掴んだ。それから、爺ちゃん
に暇さえ出来たらチャクラの制御の仕方や練り方、更には手裏剣術
や忍の心得なども仕込まれていった。

そんな事を続けていたある日。庭で1人、池で 水上歩行の業 を
していると聞き覚えのある声が聞こえた。

????

「お、もう出来そうじゃないか。」

ナルト

「あ、カカシ先生。あ？！ああゝあっああゝ！？！？」

『ドッボン』という音と水飛沫を上げながら見事に、池の水中へと引き込まれた。まだ少しの油断もならないと言ったことか・・・。

カカシ

「水上歩行の業はやっぱり難しいだろう。」

とニヤニヤしながら聞いてくる。そして、やっと池から上がってきたオレは答える。

ナルト

「でも、術はもう出来るようになった。例えば・・・分身の術！！！」

印を結んで、そう唱えると『ポン』と煙と音を上げて4体の分身が出てきた。

ナルト

「それに・・・変化の術！」

今度は、分身が消えて自分がカカシ先生に化ける。

ナルト

「どう？」

カカシ

「うゝん。ま、ギリギリ合格ってところだな。」

ナルト

「本当？」

カカシ

「ああ。ところでナルト。お前、性質変化って教えたよな。今日は、お前の性質を調べてみようと思って来たわけなんだが……。」

カカシ先生の話が終わる前に、先生が手に持っていた紙を奪い取ってチャクラを流し込んでいた。すると……、

カカシ

「ほお……木ノ葉では珍しい風の性質か。」

ナルト

「なにに！新しい術でも教えてくれるの？」

カカシ

「いんや。それは、水上歩行の業が完璧になってからの話だ。」

ナルト

「りょーかい。」

と、まあこんな感じでメキメキと成長していくわけだ。そして、水上歩行の業が完璧になった頃には、精神世界でしか会えなかった楓を実体化させることに成功した（実際はマグレだったが）。

第4話

それから時は流れ、うずまきナルト8歳。この年から木ノ葉の里にある安いアパートで暮らし始めた。とは言っても、実体化した楓も一緒だから許可が出たのだが。しかし、楓は家事的なもの――料理・掃除・洗濯etc...が壊滅的にダメだったから、あまり意味は成さないのだが保護者的な意味合いで大人が必要だったのである。

そして、その翌年から忍者学校、通称アカデミーにも通い始めた。そのアカデミーの生活は、思ったよりも充実していた。何故なら、あまりくだらないイジメみたいな事は発生しなかったし、友達と叫べる者達も出来たからだ。まあ、授業は低レベル過ぎてつまらない事もあるがそれでも充実していたと思えた。

そんな、楽しい時間はあっという間に過ぎ去っていくものであり、アカデミー過程最後の年も終えて卒業試験を受けていた。

イルカ

「今年度の卒業試験の内容は昨年度同様に 分身の術 とする。呼ばれた者は一人ずつ隣の教室に来るように！」

そう言つて、教室を出て行った。すると、しばらくしない内に名前が呼ばれ、その名前を呼ばれた人が教室を出て行く。そこでシカマルが口を開く。

シカマル

「あゝめんどくせえ。お前はいゝよなあナルト。分身なんて楽勝だ

る？」

ナルト

「あゝあ、IQ200が何を言ってるのだから。」

等とふざけている間に、オレの番が回ってきたみたいだった。

ナルト

「じゃ、頑張る。」

キバ

「ほどほどにな！」

と言うことで、場所は移して隣の卒業試験会場となっている教室。そこには、イルカ先生ともう一人よく知らない先生が座っていた。

イルカ

「・・・いいぞ。」

ナルト

「影分身の術！」

高等忍術の一つで、つい先日にも爺ちゃんに教えてもらったものだ。これには、イルカ先生もびっくりしていたが、

イルカ

「うずまきナルト合格つと・・・おめでとつ。」

そして、通信簿と木ノ葉の額宛てを手渡された。

通信簿

忍術： 体術： 幻術：○

協調：○ 積極：○ 態度：

備考：忍術や体術はずば抜けていますが、

授業中に友達とサボるのはやめましょう。

他はとても良いので余計にその点が目立ちます。

とりあえず合格の報告を楓と爺ちゃんにした後は、何がともあれ下忍になれるという事でいつもに増して修行に力が入った。今のオレの師匠は、蒼龍―通称 龍兄（りゆうにい）という、暗部の人でめちゃめちゃ強く、教え方の上手い人だからとても楽しくてついつい時間を忘れて楓に怒られるのが日課になってしまっている。

第5話

オレは、アカデミーの卒業試験合格者が集められての卒業生説明会に来ていた。そこには、オレが親しくしている奴らは勢揃いしていて、皆で話したりしていた。

そんな、教室の様子を 遠眼鏡の術 で、観察している、火影これから班分けされる各班の担当上忍達がいた。

上忍 A

「あれですね？噂のうずまきナルトというのは……。」

上忍 B

「そして、今年のナンバーワン・ルーキーのうちはサスケはあれか・……。」

三代目

「そうじゃ。」

紅

「例の九尾の件の子とうちは一族の生き残り……。」

そんな会話がされているとは知らずに、オレ達は席に着席してイルカ先生の話聞き流していた。そして、これからの忍としての人生を占う大事なチーム発表が始まった。

イルカ

「……次、第7班―うずまきナルト……春野サクラ……うち

はサスケ。」

何ともアンバランス（まわりの班分けから見ても）な班員の構成だな
あと思った。なぜなら他の班は、大体全ての班の力量が均等になる
ように編成されているのに、この班だけ実技のNo.1とNo.2
それに座学No.1とアカデミーでも成績優秀者が集められている
のだから……。

それから、残っている他の班のメンバーも発表されて午後まで各自
休憩と昼食をとる為の休み時間を与えられてた。

その後、担当上忍が迎えに来る予定だったが、オレらの班の担当
上忍は何時まで経ってもやってくる気配が微塵も感じられなかった。
そしてついに残っている人も第7班の3人のみとなってしまうた。
流石に、ここまでも人を待たせるのは、カカシ先生しかない。と
思った時に、そのカカシ先生が教室に現れた。……うん。反省の
色は全く無いね。

カカシ

「いやあゝすまんすまん。今日は、向かい風が厳しくてな。」

と、真顔でしかもオレ以外は初対面なのにも関わらずケロッとした
表情と口調で言った。

サクラ

「それ、嘘ですよね！」

流石に黙っていらなかったサクラがツツコミを入れるが、オレが
カバーをする。

ナルト

「うん。カカシ先生は、こういう時間にルーズな人だから諦めよう

（いつも遅れてくる理由は、前に教えてもらったけど、ここでは言わないほうが良い様な気がする）。」

この発言で、サクラには「知り合いなの!？」と驚かれることになったが、普通に「そうだよ。」と流した。

そして、今のところサスケはずっとカカシ先生を睨み付けている。

カカシ

「ま、ここで自己紹介をし合うのも味気無いからな、アカデミーの屋上にでも場所を移すか。」

そういう事で、場所を変えることにした。

第6話

という事で、場所を移して今はアカデミーの屋上

カカシ

「じゃ、まずは自己紹介からしてもらおうかな。」

サクラ

「自己紹介ってどんな事を言えば良いんですか？」

と普通に疑問に思ったことを聞く。

カカシ

「そりゃあ好きなもの、嫌いなもの。将来の夢とか趣味とか・・・ま、そんなのだ。」

しかしサクラは「名を聞くときはまずは名乗ってほしい。しかも、一番怪しいし・・・。」的な趣旨のことを言ってまずは、先生からの自己紹介となった。

カカシ

「じゃあ俺からか？俺の名前は、はたけカカシって名前だ。好き嫌いをお前らに教える気はない。将来の夢って俺が言ってもなあ・・・。趣味は・・・ま、色々だ。」

サクラがサスケに話しかけていたがサスケはそれを軽く無視し、オレサクラサスケの順で自己紹介をすることになった。

ナルト

「オレの名前は、うずまきナルト。好きなことは、龍兄や爺ちゃんとの修行。あと、最近やつと美味しくなってきた楓の作ったサンドウィッチ。嫌いなことは、自分が面倒だと思ふことをやらされること。将来の夢は、木ノ葉の人に認めてもらうこと。」

カカシ

「（なるほど。ナルトラしいっちゃらしいか。）・・・次。桃色の髪の子。」

サクラ

「春野サクラです。好きなことは・・・っていうか、好きな人は（サスケ君？）・・・っでえ。将来の夢は（サスケ君のお嫁さん？）・・・きゃー！！」

カカシ

「（今時の女の子は、任務より恋愛だな。）はい、次。黒髪のお前。」

サスケ

「名はうちはサスケ。嫌いなものならたくさんあるが、好きなものは・・・別にない。それから・・・夢なんて言葉で終わらせる気はないが・・・野望はある！一族の復興とある男を必ず・・・殺すことだ！！」

カカシ

「（・・・やはりな。）・・・よし！明日から任務やるぞ。まずはこの四人だけで任務をやる。それは・・・サバイバル演習だ。」

やはりと言うかサクラは、‘演習’という言葉に突っかかってくる。

サクラ

「なんで任務で演習やんのよ？演習ならアカデミーでさんざんやっ
たわよ！」

カカシ

「相手はオレだがただの演習じゃない。」

すると不気味に笑い出すカカシ

サクラ

「何が可笑しいのよ？」

との問いには答えずに

カカシ

「いや・・・俺がこれを言ったらお前ら絶対引くから。」

そう言ったのにも関わらずカカシは話を続ける。

カカシ

「卒業生27名中、下忍と認められるのはわずか9名。残り18名
は再びアカデミーへ戻される。つまりこの演習は脱落率66%以上の
超難関テストだ。」

オレ以外の2人の表情が固まった・・・

カカシ

「ほらあく引いたあ！という訳で、明日朝5時第3演習場集合！あ、
忍び用具一式持って来い！・・・あと、朝飯は抜いて来い……………」

・吐くぞ。
「

第7話

翌日の朝5時。みんな眠そうな眼で集まっていた。しかし集合時間を過ぎてモカシ先生がやって来る気配は無い。それから1時間・・・2時間・・・そして3時間の計6時間が経つ頃にノコノコやって来た。

カカシ

「いやあゝすまないねえ。今日は目も前を黒猫に横切られてな。」

とか、いつも以上にくだらない言い訳を言ってるし・・・。オレだつてもちろん時間通り来るとは思ってなかったから覚悟はしていたけど、流石に6時間近くとは想定外だ。

カカシ

「よし！12時セット完了！それじゃ始めるぞ。まずここに、鈴が2つある・・・これを俺から昼までに奪い取ることが課題だ。もし昼までに俺から鈴を奪えなかった奴は昼飯抜き！あの丸太に縛りつけた上に目の前でオレが弁当食うから。」

その言葉で、やつと朝飯を抜いて来い。と言った意味が分かったオレ達3人は、「ぐうぐう」とお腹の虫が鳴った。

カカシ先生は、その音を満足そうにニヤニヤしながら聞きいていた。でもその表情は直ぐに消えて真剣な表情をして説明を続けた。

カカシ

「鈴は一人1つでいい。2つしかないから・・・必然的に一人丸太行きになる。・・・で、鈴を取れなかった奴は任務失敗ってことで

失格だ。つまりこの中で最低でも一人は学校へ戻ってもらうことになるわけだ……。あ、手裏剣とクナイやその他の忍具も使っていないぞ。オレを殺すつもりで来ないと取れないからな。」

とカカシ先生が言うとサクラが、

サクラ

「でも、危ないわよ先生！」

ナルト

「大丈夫だよ。カカシ先生は、アホ面で変態で大遅刻魔だけど、仮にも上忍。まだ、下忍にもなってないオレ達に殺されるようなヘマはしないよ。」

オレの言葉に、「なるほどっ！」っていう感じの表情をするサクラ。

カカシ

「（大分、酷い言われようだな。流石に6時間は不味かったか？）」

意外と反省をしているカカシであった。

カカシ

「ま、じゃそういう訳だから、殺す気で来いよ。それじゃあ、よい……。スタートオ！」

その合図で、下忍候補生は一斉にその場から消え去り各々が思い思いの場所に隠れた。

カカシ

「忍たる者、基本は気配を消し隠れるべし。（よし。みんなうまく

隠れたな。ま、下忍候補生がどこに隠れても直ぐに見つけられるが・
・基本をしっかりと実践しているのは良いことだ。ヽ・・・はあく。

」

最後に溜め息をついた理由？それは、簡単だ。オレが隠れずに堂々と目の前に立っていたのだから。

カカシ

「お前、やる気ある？」

ナルト

「その言葉そのまんま返すよ。それと、カカシ先生相手に隠れる意味が無いと思うしね。」

第8話

カカシ

「あら、褒めてくれてる？」

ふざけているその問いには、答えずにカカシ先生の背後に忍ばせておいたオレの影分身が殴りにかかる。しかし、それが分かっていたかのように難無く受け止められるが、その影分身には・・・

カカシ

「起爆札っ!？」

そう。影分身には起爆札が貼り付けられていた。それを確認したカカシ先生は、瞬時に回避するために林の中に隠れた。その直後、影分身ごと大きな爆発が起こった。

カカシ

「ったく・・・いつの間に影分身なんて覚えたんだ？」

一方のオレはというと、

ナルト

「まあ、いい感じだったかな。でも、カカシ先生が出てこないと鈴も奪えやしないからなあ。ちっとチャクラを使うことになるけど・・・」

そして、印を結んだ。

ナルト

「風遁・真空連波　！！」

口から吹いた複数のカマイタチがカカシ先生が隠れているであろう林の木々をバツバツと切り倒していく。すると、カカシ先生の姿があった。

ナルト

「見つけた。　風遁・風切りの術　！」

今度は、一筋のカマイタチがカカシ先生を襲う。

カカシ

「馬鹿正直に術を発動させれば良いってもんじゃないでしょ。」

と、避けられた。しかし、　風遁・風切りの術　で出したカマイタチはそのまま何かを切った。すると、カカシ先生に向かってクナイや手裏剣が四方八方から飛んでくる。

カカシ

「（トラップだったか・・・。）」

そこに、追い撃ちをかけるようにして　風遁・烈風掌　を用いた手裏剣を投げつけた。

カカシ

「（何イ！？）」

『ズシャ！ズシャ！ズシャ！』・・・そんな効果音と血飛沫を上げながらカカシ先生は倒れた。その様子を隠れて見ていたサクラは小

さな悲鳴を上げた。サスケは、

サスケ

「（ 変わり身の術 か。アカデミーでも習う初歩中の初歩の術じやねーか。）」

そういう事だった。カカシ先生は、 変わり身の術 でその場を切り抜けていた。そして、カカシ先生はオレの後ろに立っていた。

カカシ

「忍戦術の心得其の一。体術を教えてやろう。」

その声に、オレはゾクリとしたが、吹き向くのと同時に、

ナルト

「 風遁・嵐脚 」

オレの脚から繰り出される“ 飛ぶ斬撃 ”が、カカシ先生の顔面を直撃した・・・はずだったのだが、手に着けている手甲によって弾かれた。

カカシ

「危ないな。流石にビビッた。が！」

と言うと、姿は消えていた。

カカシ

「 木ノ葉隠れ秘伝体術奥義・千年殺し ！！ 」

強烈な浣腸をされたオレは、意識を失ったまま飛ばされた。そして、

着地の衝撃と共に目を覚ました・
・
・。

第9話

ナルト

「・・・痔になるかと思った。」

冗談ではない、マジだ。

サクラ side

私は、ナルトと先生の凄まじい戦闘とそのオチを見て啞然としていた。そして、この謎な状況をサスケ君と協力し打開しようと動こうとしたときだった。『ガサツ』とした音が聞こえてきた。その音の発信源を見ると、カカシ先生が熱心に本を読んでいるようであり、こちらに気づいてはいないようだ。

サクラ

「（バレてない。・・・セーフ！！）」

そう心の中で叫んだその時、背後から目の前で本を読んでいるはずのカカシの声がした。

カカシ

「サクラ、後ろ。」

サクラ

「へ！？」

慌てて振り返ると、サクラの間後ろにもカカシが立っていた。そして、

カカシ

「 魔 幻 ・ 奈 落 見 の 術 。 」

私は、一瞬意識が遠のいた・・・。

そして直ぐにハッと我に返る。周囲を見回すが、先生の姿はない。声をかけられたところまでは覚えているのだが、仕掛けられた覚えがない。

サクラ

「へ！？え！？どうなつてんの！？カカシ先生は！？」

自分が身を隠していることも忘れて大声で叫ぶサクラ。
混乱した頭で周囲をもう一度見渡すと、かすかな声が木の陰からした。

???

「・・・クラ・・・・・・・・。」

サクラ

「（・・・！この声は、サスケ君！？）」

そして、向かった先にあったものとは・・・。

サクラ

「ぎゃあああああああ！！！！？」

そのまま私は、気を失った。

ナルト side

オレが、お尻を擦っていると森の方から悲鳴が聞こえた。・・・サクラだ。とりあえず、幻術だろうから解くだけ解いてあげよう・・・。

始めに報告しておこうと思うけど、オレは幻術タイプの忍ではないと龍兄に断言されている。しかし、他の忍との戦闘においては、相手が幻術使いである可能性もある。と言うことで、幻術返しは習っていた。

そんな説明をしている内に、サクラの幻術は既に解き終えていた。

サクラ

「あれ！？サ、サスケ君は！？」

ナルト

「それは、カカシ先生に幻術を見せられていたんだよ。」

そういうと、「そつかぁ・・・。」と若干の悔しさを滲ませながら答えていた。すると、しばらくしない内にもう一つ、叫び声？的な何かが聞こえてきた。そこで、見た光景とは・・・、

サクラ

「ぎゃあああ！！今度は生首イイ！！！！？」

サスケ

「・・・・・・・・・・。」

ナルト

「いや、カカシ先生の土遁系統の忍術で埋められているだけでしょ・
・・。」

そこには、呆れているオレと気絶寸前のサクラ、少し恥ずかしいのか頬を赤らめているサスケの姿があった。しかし、無情にも12時の時を知らせるアラームが演習場内に鳴り響いた・・・。

第10話

今現在、12時10分を少し過ぎた頃……。オレ達、第7班は慰霊碑の前に集合していた。すると、何の前触れも無しにカカシが口を開いた。

カカシ

「お、腹の虫が鳴ってるな。ところで、この演習についてだが……。ま、お前らはアカデミーに戻る必要もないな。」

オレは、その言葉の真意と嫌なまでの笑顔の理由を汲み取り損ねていた。

カカシ

「そ、三人とも……。忍者をやめろ!!」

……。その場の空気が固まった。その状況下、サクラが反論する。

サクラ

「どうゆうこと!? 確かに私達は、確かに鈴は取れなかったけど……。何で『やめろ!!』まで言われなくちゃならないんですか!?!」

カカシ

「はぁ……。どいつもこいつも、忍者になる資格のないただのガキだってことだよ。」

その言葉に『カチン』と来たのか、サスケが突撃を仕掛けたが、そ

れも直ぐにカカシ先生に止められる。

カカシ

「だからガキだって言っただ。お前ら忍者舐めてんのか？あん？！何のために班ごとのチームに分けて演習やってると思ってる！？」

サクラ

「ど、どういうこと？」

カカシ

「つまり、お前らはこの試験の答えをまるで理解していない。」

サクラ

「だから、さつきからそれが聞きたいんです！！」

そんな半逆ギレ状態のサクラに『やれやれ・・・』といった態度をとるカカシ先生。

カカシ

「それは、」

ナルト

「それは、チームワークだよ。」

カカシ

「・・・気付いていたのか？」

オレが、割り込んだことに驚いた表情を少しだけ浮かべるカカシ先生。

ナルト

「気付いた理由として、挙げられる点は4つ。下忍やその他階級の任務時の基本的行動人数は4人。そして、アカデミー・・・学校側が意味あって割り振りされたこの班員と担当教師。それは、ほぼ里側の意思と読み取っても変わりはない。その点を踏まえての力カシ先生の言ったこのセリフ——『鈴は一人1つでいい。2つしかないから・・・必然的に一人丸太行きになる。・・・で、鈴を取れなかった奴は任務失敗ってことで失格だ。つまりこの中で最低でも一人は学校へ戻ってもらうことになる』——それは、明らかに不自然。そして、落第率66%・・・27人中不合格者18名、つまり合格者9名という何ともいい感じの3の倍数。最後に何よりの証拠は、どう足掻いたって下忍にもなっていない下忍候補生が上忍から鈴というものを盗れる訳が無いという曲げなれない事実。これを踏まえれば、何を引き出したいのが自然と見えてくる。」

この推理を聞いている人々の表情は、様々だった・・・。

第11話

カカシ side

ナルト

「これを踏まえれば、何を引き出したいのか・・・何を求められているのか・・・それが自然と見えてくる。」

俺は、ナルトが小さいときから面識があつた。だから、頭の回転が速いことや忍術を習得するスピードが他の子供より格違いに凄いことは知っていたが、頭脳も術もここまでとは・・・だが、

カカシ

「ナルト。そこまで分かつて、何故一人で向かってきた？」

ナルト

「サスケとサクラの性格的に確固たる証拠・・・つまりは、下忍候補生と上忍の力量の差をはっきりと示さないと協力は成り立たないと思ったんだ。(ついでに腹立ってたし)そして、その布石を置き終わったときにアラームが鳴った。それは、カカシ先生が集合時間に「6時間」も・・・「6時間」も遅れて来たからなんだけど。」

あ、やっぱり相当根に持ってるな・・・。

カカシ

「ま、俺にも非が無いとは言えない訳じゃあ無い。・・・最後にもう一度だけチャンスやる。ただし、昼からはもっと過酷な鈴取り合戦だ。挑戦したい奴だけ飯を食え。ただし、サスケには食わせる

な。上官に攻撃してきた罰だ。もしそいつに食わせたりしたら、そいつをその時点で不合格とする。言つとくが、ここでは俺がルールだからな。」

そう言い残して去って行つた。

ナルトside

今は弁当をオレとサクラが食べている。そして、カカシ先生の気配は・・・感じられない。スツと弁当をサスケに渡す。

サクラ

「ちよつと、不味いわよ！」

サスケ

「そうだ。俺は、お前の施しは受けない。」

うゝん。まだ、理解はしてないらしい。

ナルト

「じゃあ、オレ達の足手纏いにならないようにならないように食べて。それが、ここでのチームワークだよ。」

サスケ

「・・・分かった。食えば良いんだろ！？食えば！俺は知らねえかなな！」

すると、オレの渡した弁当の中身は一瞬にしてサスケの胃袋の中に消えていった。そして、何処からとも無く嵐はやってきた。

カカシ

「お前らあああ！！！！！」

思わず飛び退くサクラ。戦闘態勢を敷くサスケ。とりあえず、成り行きを見守るオレ。

カカシ

「・・・ごーつかく」

目が点になるサクラとサスケ。そして、もう一度。

カカシ

「合格。・・・忍者は裏の裏を読むべし。忍者の世界でルールや掟を破る奴はクズ呼ばわりされる。けどな！仲間を大切にしない奴はそれ以上のクズだ！」

ここで、本日初めて全員の笑顔が花を咲かせる。

カカシ

「これにて演習終わり、全員合格！第七班は明日より、任務開始だ！」

第12話

現在、自宅で大人3人相手とお話中・・・。

カカシ

「それよりナルト。影分身の術は、誰から教わったんだ？蒼龍か？三代目様か？」

ナルト

「龍兄だよ。」

別に隠す必要性を感じない為、大人しく白状する。

カカシ

「やっぱりねえ。蒼龍、お前のせいで危うく殺されかけた。」

と、愚痴りながら蒼龍を軽く睨む。

蒼龍

「ホントか！？惜しいな。あと、もうちょっとだったんだな。」

そう言いながら、オレの頭を撫でてくる龍兄。もしや、カカシ先生を間接的に殺めさせる為に、術を教えてくれているのだろうか？

カカシ

「その様子だと、風遁・真空連波や風遁・風切りの術を教えたのも蒼龍だな。」

蒼龍

「当ったり〜！」

Vサインとしてやったりのオーラを放っている。

ナルト

「でも、あともう少しで顔面が無くなった、風遁・嵐脚 は完全オリジナルだけだね。」

カカシ

「あゝあれね。アハハハ……。」

手甲で流されたのだが、今は隠してテーピングを施しているのだった。冷や汗ものの代物だった。と、思い返しても冷や汗が出る力カシ先生であつた。

楓

「そなたのいつもの頑張りは、無駄じゃなかったのだな。わらわは嬉しゅうて嬉しゅうて……。」

何故か、涙を瞳に溜めている。

ナルト

「???よく分からないけど泣かないでよ、楓。」

楓

「嗚呼、そなたは何とわらわに優しいのじゃ。はううう?」

ポーツとなつてしまつて、既に意識は何処かへと旅立ってしまったている。

ナルト

「・・・・??」

カカシ

「ナルト、絶対に楓さんを手放すんじゃないぞ。大人になったら、後悔することになる。」

何やら拳を握り締めて熱弁している。

ナルト

「後悔?ん??ん??」

が、オレはさっぱり意味が分かっていない。

蒼龍

「カカシさんってそんなキャラだったっけ?」

と、ニヤニヤしたトーンの声で茶化す。

蒼龍

「確かに、楓さんは綺麗だしね。でも、まっ諦めるんだなカカシ君」

何故、龍兄が楽しそうなのかはよく分からないところである。そして、何故カカシ先生が落ち込んでいるのかも。

蒼龍

「じゃ、我が弟よ。お前に意外性があることを信じている。あ、でも楓さんに任せておけば大丈夫かな?任務頑張れよ。」

そう言うと、カカシ先生の首根っこを捕まえて尚且つ 瞬身の術で、何処かへ消えていってしまった。

ナルト

「うーん・・・なんだったんだろう。龍兄とカカシ先生。それに、まだ自分の世界にトリップしちゃって一向に戻ってくる様子が全く見られない楓。」

何とも不思議な一日であった・・・。

準主要キャラクター紹介

・蒼龍

所属は、暗殺戦術特殊部隊第零班の班長。常に暗部用の仮面を着用している。

年齢は恐らく20前後。うずまきナルトとは、盃を交わして義兄弟となっただけ。

実力は申し分無く、うちはイタチと渡り合えるぐらいの実力を持ち合わせていて、

風遁以外の四遁を使えるらしい。（あくまでも噂。）別名・龍兄。

・はたけカカシ

元暗殺戦術特殊部隊第参班の班長・銀狼。現在は、第7班の担当上忍。

うちは一族の血継限界 写輪眼 の持ち主。異名・『写輪眼のカカシ』若しくは、

『コピー忍者のカカシ』として、他里の忍からは恐れられている。

・うちはサスケ

うずまきナルトと同期でチームメイトの第7班の班員。才能やセンスの塊で、

性質変化は火遁。体術と忍術は、中々のもので、カカシも驚いた。

・春野サクラ

任務より恋をモットーに生きる乙女チックな恋する少女。
座学と潜在的な幻術の
才能を持っている。

第13話

そして第7班として活動をし始め、早2週間が過ぎた頃、何時もの様に火影様の所へ行き任務を受注しに行った。

三代目

「・・・老中様の子どものお守に、畑仕事の手伝い、忍具の手入れと、それから・・・。」

と、次のDランク任務に何を持ってくるか思考中の様だった。

ナルト

「爺・・・三代目様。」

危うく公の場で「爺ちゃん」発言をしそうになったが飲み込んだ。

三代目

「ん、何じゃ？」

ナルト

「いや、そろそろまともな任務とか。」

そこまで言っていると、爺ちゃんの隣に座って補佐をしていたイルカ先生にこっ酷く叱られる羽目になった。

カカシ

「そうですね。こいつらの成長を見るのには、Dランクじゃ物足りなくなっています。どうか、私からも一つ我が俤を。」

珍しくこちらの味方に付いてくれた力カシ先生。

三代目

「そこまで言うのであれば、Ｃランク任務・・・ある方の支援と護衛じゃ。」

「護衛」と聞いて興奮するサクラ。

三代目

「そう慌てるでない、今から紹介する。・・・入って来て貰えますかな？」

そして、入ってきた人物は、乙女の夢を打ち壊すには十分だった。片手に酒瓶を持っていたいかにも酒臭そうなおっさん。

依頼人

「なんだあ？超ガキばつかじゃねえかよ。特に、その超金髪の超アホ面。お前それ本当に忍者かあ！？」

ナルト

「これでも一応、IQ300ですけど。」

うん。先日、シカマルン家に行ったらIQテストのプリントが落ちていたからやってみた・・・。解答で丸付け・・・結果IQ300でした。

タズナ

「・・・・。ゴホン！・・・わしは橋作りの超名人、タズナというもんじゃ。わしが国に帰って橋を完成させるまでの間、命を賭けて超

護衛してもらおう！」

カカシ

「出発は、明日の午前9時だ。皆、遅れないように。」

どの面下げて言ってるんだか……。

その翌日午前9時30分。全員集合及び波の国に出発。出発の遅れた理由は、もちろん毎度の事ながらカカシ先生。で、言い訳は——『すまないね。今日は、道に迷ってな。』……だったっけか？最悪、依頼人がいる任務では、遅刻は勘弁してほしい。まあ、もちろん通常のDランク任務も遅刻はしなくてもraithたいけど。

そして暫く、歩いていると不意にサクラが話し始めた。

サクラ

「ねえタズナさん……タズナさんの国って『波の国』でしょ？」

タズナ

「それがどうした？」

あまり機嫌の良くないトーンで聞き返した。

サクラ

「ねえカカシ先生……その国にも忍者っているの？」

そこから、長い話が始まった。

第14話

サクラ

「ねえカカシ先生・・・その国にも忍者っているの？」

カカシ

「いや、波の国に忍者はいない。だけど、大抵の他の国には文化や風習こそ違うが、隠れ里が存在し、忍者がいる。大陸にあるたくさんの国々にとって忍びの里の存在っていうのは国の軍事力にあたるつまり、それで隣接する他国との関係を保っている訳だ。が、かと言って里は国の支配下にあるんじゃないやなくて、あくまで立場は対等にあるんだがな。波の国のように他国から干渉されにくい小さな島国なんかでは忍びの里が必要でない場合もあるしな。それぞれの忍びの里を持つ国の中でも、『火』、『水』、『雷』、『風』、『土』の五ヶ国は、国土も大きく力も絶大なため、忍び五大国と呼ばれている。火の国〓木ノ葉隠れの里、水の国〓霧隠れの里、雷の国〓雲隠れの里、風の国〓砂隠れの里、土の国〓岩隠れの里、各隠れ里の長のみが影の名を語る事を許されている。その火影、水影、雷影、風影、土影の所謂、五影は全世界、何万の忍の頂点に君臨する忍者達だ。」

サクラ

「へえゝ火影様って凄いんだあゝ！（あの爺さんが？何か、胡散臭い！）」

言っていることと表情が全く一致していない。

カカシ

「サクラ。お前、火影様のこと疑ったろ。」

その言葉に、『ギクリ』となるサクラ。

カカシ

「ま、安心しろ。Cランク任務で、他国の忍との戦闘なんて滅多にないから。」

その言葉に安堵したサクラと、表情を曇らせたタズナがいた。

それから川沿いを暫く歩いていると、何故か水溜りがあった。妙だな・・・と思いながらも無視して進んでいくと急に後方で殺気が発生した。

カカシ

「何っ?!」

という言葉を発したかと思うと、先生の体はチェーンでバラバラに引き裂かれた。

サクラ

「先生!!」

叫び声にも近い声を上げたところで、敵2体を繋いでいたチェーンが、手裏剣とクナイによって木に打ち込まれた。

ナルト

「風遁・真空波!!」

サスケ

「火遁・豪火球の術　！！」

霧隠れの額宛てをしている敵は、ノックダウン詳しくは、出血多量と全身火傷の首の皮一枚で繋がっている状態。すると、死んだ振り・
・ 変わり身の術　をしていた力カシ先生が、パチパチ手を叩きながら出てきた。

力カシ

「とりあえずナルト、サスケ。中々良かったぞ。」

ナルト

「そりゃどうも」

サクラとタズナは力カシ先生が生きていたことにビックリしている。

力カシ「ところで、タズナさん・・・ちょっとお話があります。」

その言葉で場の空気が少し引き締まった・・・。

第15話

カカシ

「さっきの忍者は、霧隠れの中忍ってトコだ。こいつ等はいかなる犠牲を払っても戦い続けることで知られる忍だ。」

タズナ

「アンタそれを知っていて、何故ガキにやらせた」

その言葉には若干だが、怒りも混ざっているように見えた。しかし、カカシの話す内容が後半になっていくにつれ、その表情にも変化が現れた。

カカシ

「私はその気になればこいつくらい瞬殺できます。それにこの班は、うちの里の最有力下忍班で私の自慢の班ですし、さっきだって意図も簡単に中忍を倒す程の実力もありますしね。が、私には知る必要があったのですよ・・・この敵のターゲットが誰であるのかをね。つまり狙われているのは、あなたなのか、それとも、我々忍のうちの誰かなのか、ということですよ。我々はあなたが忍に狙われているなんて話は聞いていない。依頼内容はギャングや盗賊など、ただの武装集団からの護衛だったはず・・・そうすると、Bランク以上の任務だ。依頼は橋を作るまでの支援護衛という名目だったはずですよ。敵が忍者であるならば、迷わず高額なBランク任務に設定されたはずですよ。何か訳ありみたいですが、依頼で嘘をつかれると困ります。これだと我々の任務外ってことになりますね。」

そう言うと、サクラが、

サクラ

「・・・止めましょ？こんな任務まだ私には荷が重過ぎるわサスケ君やナルトには大丈夫かもしれないけど・・・私は動けなかったし、実質的ランクも下忍に負えるレベルじゃ・・・。」

その場で話し合い、とりあえず家までは送り届ける。その後は、また話し合いで決める。という風に決まった。まあ、そうなるだろうとは思っていたけど。そして、その道中にタズナさんを狙っている人物の名前が出てきた。その名は、「ガトー」。世界有数の大金持ちと言ったことで、今さっき倒した奴以上の忍を雇っている可能性が非常に高くなり、カカシ先生は、応援を要請するために、口寄せの術で、「パツクン」を呼び出し、里に書を持っていった。

タズナ

「超すまん。恩にきる。（・・・勝った！）」

そんなこんなで、時間は進んで行きしばらくの道のりは無事に進んでいた。そして、そんな束の間の平穏も終わりを告げることになる。そして・・・、

カカシ

「全員、伏せるー！！」

カカシ先生がいきなり大声を出して指示した。それがまるで合図だったように、大きな刀が上空を飛んでいった。そしてその大きな刀はオレ達の目の前にあった大木に勢い良く突き刺さった。

カカシ

「（あいつは確か・・・）へえーこりゃこりゃー霧隠れの抜け忍、

桃地再不斬君じゃくないですか？」

第16話

カカシ

「（あいつは確か・・・）へえこりゃこりゃ霧隠れの抜け忍、桃地再不斬君じゃくないですか？（こいつが相手となると・・・）このままじゃちつとキツイか・・・。」

そう言つて、額当てを正常位に戻した。すると、隠れていた左目に3つの勾玉が映し出されていた。

再不斬

「ほお・・・。噂に聞く写輪眼を早速見られるとは・・・。光栄だね。」

しかし、それには答えずにオレらに指示を与える。

カカシ

「お前ら、正の陣だ！タズナさんを守れ！それが、ここでのチームワークだ！」

すると、空気の読めないサクラが疑問に思っていたことを聞く。

サクラ

「写輪眼って一体なんなのよ！？」

再不斬

「写輪眼・・・眼光が生み出し、瞳が発する力。所謂、瞳術の使い手は、全ての幻術、体術、忍術を瞬時に見通し、跳ね返してしまう

眼力を持つという・・・写輪眼は、その瞳術使いが特有に備え持つ瞳の種類の1つ。しかし、写輪眼の能力はそれだけじゃない。それ以上に怖いのが、その目で相手の技を見極め瞬時にコピーしてしまうことだ。・・・俺様が霧隠れの暗殺部隊にいた頃、携帯していたビンゴブックに、お前の手配情報が載ってたぞ。それには、こうも記されていた・・・千以上の術をコピーした男・・・コピー忍者の力カシとな・・・」

サクラが各自心中で感想を述べていたが、戦闘は既に始まりそうだった。

再不斬

「お話はこの位にしとこうぜ・・・俺はそのじじいをさっさと殺んなきゃならねえ。」

と言われ、オレ達はそのでやっとな陣をとった。すると再不斬が、猛スピードで、動き始めた。そして、どんどん霧が濃くなっていく。ついには、ほぼ、視界が0なくらいまでになった。

再不斬

「忍法・霧隠れの術。」

力カシ

「あいつがまず最初に狙うのは俺だろう。桃地再不斬、奴は霧隠れの元暗部で無音殺人術の達人として知られた男だ。その名の通り無音で一瞬の内に暗殺する術だ。気がついたらあの世だったなんてことになりかねない。俺も写輪眼を全て上手く使いこなせるわけじゃない。・・・お前たちも気を抜くな！」

力カシ先生がそう言うと、再不斬の声の不気味に響き渡った。

再不斬

『ハカ所・・・咽頭、脊柱、頸動脈に鎖骨下動脈、腎臓、心臓・・・さて、どの急所がいい？』

その言葉に、完全ビビってしまったサクラ。既にガタガタ震えている。

カカシ

「サクラ、安心しろ。俺の仲間はずっと絶対に殺させやしないよ。」

ホッと息をついた瞬間、声の持ち主は近くにいた。

再不斬

「それは、どうかな？・・・？！？！」

第17話

?? side

オレは、カカシ先輩の伝令役のパツクンから来た「応援要請」で、派遣されることとなった人物であり、木ノ葉の里の裏で呼ばれている通り名？あだ名は、『木ノ葉一の自由人』。理由：暗殺戦術特殊部隊第零班の班長である癖に、働いているところを目撃している人がほばいない。第零班に与えられた任務は、基本的に班員だけで出勤させる。という2点なのだが、本当は短期暗殺任務を週に数回も行っているのだ。

それは置いておいて、「応援要請」の件で三代目火影様からの命により、今は亡き四代目火影しか使えないという 飛雷神の術 を用いて、ナルトに持たせてあるお守り（術式）に瞬時に到着した。

ナルト side

再不斬

「それは、どうかな？」

そう言った再不斬の声が聞こえた時には、既に己の陣が破られていた。そして、大刀を引いていた。それは正に絶体絶命だった。しかし、

再不斬

「!?!?!何ッ!?!」

??

「あゝっと、オレの義弟に手を出すのは待ってもらおうか。」

再不斬

「・・・木ノ葉の暗部か。」

この場合は、殺気と緊張感に包まれていた。

??

「ああ。お前なら知ってるだろ？ビンゴブックに載ってる木ノ葉暗殺戦術特殊部隊の危険度レベルMAXの第零班班長を。」

再不斬

「そうか、お前が『蒼龍』か。」

蒼龍

「そういう訳だ。今すぐ引け。」

再不斬

「無理だ。」

蒼龍

「交渉決裂だな。」

そして、フツと仮面の向こうで笑うと脚を高く上げた。

蒼龍

「痛天脚　！！」

その踵落としは、地面を半径5mを陥没させた。それを避けた再不

斬は、水面へ立っていた。そこに、

カカシ

「火遁・豪火球の術！」

再不斬

「水遁・水陣壁！」

豪火と水柱が激しくぶつかり合い、途轍もない量の水蒸気を発生させていた……。こんな事を、霧で視覚が閉ざされた状況でやっているのだから凄い。

蒼龍

「ナルト！この霧を吹き飛ばしてくれ！」

・・・でも、中々厳しいらしい。

ナルト

「了解！・・・風遁・大突破！！！」

すると、見る見るうちに霧が晴れてきた。

カカシ

「かくれんぼは、もうやめにしようじゃないか。再不斬！」

再不斬

「ああ！！水遁・水龍弾の術！！！」

蒼龍

「水遁・水爆流！！！」

カカシ

「水遁・大瀑布の術　！！」

それはそれは、大きな水流がそれぞれの意思を持ってぶつかるその様は凄まじかった。・・・が！！

？

「氷遁秘術・氷河期世界　！！」

その術で、再不斬・蒼龍・カカシの操っていた水流を始め全ての水がコチコチに凍ってしまった・・・。

第18話

？

「氷遁秘術・氷河期世界　！！」

そうして、仮面を被った者は全てを凍らせると再不斬を連れ去っていった。

カカシ

「あれは一体な・・・。」

パタリと氷が張っている水面に倒れた・・・。

・ ・ ・ ・ ・

ここは、タズナさん宅。あれから数時間経ってやっとカカシ先生は目を覚ました。

サクラ

「あ、先生！やっと目覚めました。皆！カカシ先生が起きたわよ」

「!!」

その一言で、皆がドタドタと音を立ててやってくる。そして、何気ない会話が自然発生する。

サクラ

「写輪眼ってすごいけど、そんなに疲れるんだったら考え物よね。」

「

蒼龍

「まあね。でも、それは写輪眼に対応できる“うちは一族”の体じゃないからだよ。」

サクラ

「え?どうゆうこと?」

サスケ

「写輪眼とは、うちは一族の血継限界で、しかも一部の人間にしか開眼できない特異体質だ。それを何で、カカシが持っているのかまでは知らないけどな。」

と言って、サスケがカカシ先生を睨みつけるようにして見る。そして、その場が何故か気まぜくなる。

蒼龍

「まあ、それは置いといて。再不斬達の第二波に備えて修行に移るとうしょうか。」

カカシ

「そうだな。じゃ蒼龍、頼んだぞ。」

そして、第7班の班員3名は、暗部第零班の班長に拉致られた。

・ ・ ・

そして、森の中・・・。

蒼龍

「じゃ、これから修行を始める。その修行の内容は、木登りだ。しかも、手を使わずに・・・。これは、チャクラコントロールの修行で、上手くコントロールできれば、その分だけ無駄なチャクラを使わなくて済む。つまり、簡単に例えて言うと、今のチャクラ量で1回しか出来ない術があったとしたらコントロールが上手くなるだけで2回3回と出来るようになる。と言う訳お得感満載の修行だ。で、これが終わったら 水上歩行の業 。そして、それも終わったら・・・考えとく。」

そして、この修行は既に終えているナルトとチャクラコントロールはバッチリのサクラが一発で終えた。

蒼龍

「 土遁・地盤沈降の術 。」

すると、蒼龍の周囲半径10mの地面が深さ5m程に地盤沈下した。

蒼龍

「 水遁・水乱波 。」

そして、口から多量の水を出して、大きな穴（直径20m、深さ5m）を水でいっぱいにした。

蒼龍

「じゃあ、今度は 水上歩行の業 ね。」

その修行もナルトは、既に終えているので簡単に終わった。しかし、今度はサクラも難しいようで、何度も落ちている。そして・・・、

蒼龍

「さてと、ナルトにはこの術を伝授しようか。」

開いた巻物（自分の術使用経験済一覧表）を見てそう言った・・・。

第19話

蒼龍

「術名は、圧切。その由来としては、——という事で、云わば名刀の類だ。そしてこれは、カカシ先輩の雷切と対を成すもので、スピードと突きの威力要らず。しかも、無音。術の効果としては、名刀の由来の通り圧力だけで斬るような感じ。例えば・・・」

「そう言うと、手にチャクラを集めて・・・近くにあった木に音も無く手を押し込んだ。すると、『ズドン』と音を立てて倒れた。」

ナルト

「・・・・・・凄。」

蒼龍

「と、まあこういう訳だから。印はこうこうこうね。」

そして、オレは放置された。その後、龍兄は他2人の指導に行った。

―プロジェクト―修行期間を早送りしてみよう―

1日目

ナルト： 木登りの業 【終了】 ・ 水上歩行の業 【終了】 ・

圧切 【開始】

サクラ： 木登りの業 【終了】 ・ 水上歩行の業 【開始】

サスケ： 木登りの業 【開始】

2日目

ナルト： 圧切 【継続】

サクラ： 水上歩行の業 【終了】

サスケ： 木登りの業 【終了】

3日目

ナルト： 圧切 【継続】

サクラ： 幻術返し 【開始】

サスケ： 水上歩行の業 【開始】

4日目

ナルト： 圧切 【継続】

サクラ： 幻術返し 【継続】

サスケ： 水上歩行の業 【継続】

5日目

ナルト： 圧切 【継続】

サクラ： 幻術返し 【終了】

サスケ： 水上歩行の業 【継続】

6日目

ナルト： 圧切 【継続】

サクラ：修行無しで橋工事の警護と手伝い【開始】

サスケ： 水上歩行の業 【継続】

7日目

ナルト： 圧切 【終了】

サクラ：修行無しで橋工事の警護と手伝い【継続】

サスケ： 水上歩行の業 【終了】

―プロジェクト―修行期間を早送りしてみよう― 【完】

カカシ

「もうそろそろ向こうが動いてきてても良い時期なんだがな。」

蒼龍

「仮面の子の対策は、どうします?」

カカシ

「あれは、血継限界の類だろう。」

蒼龍

「やっぱりオレが行きますか。」

カカシ

「悔しいがそれが一番だろ。」

蒼龍

「頑張れカカシ君！」

カカシ

「（蒼龍てめえ……。）」

そんなこんなで、翌日。体調がすっかり良くなったカカシ先生と修行が終わったナルトとサスケ、それを指導していた蒼龍、そして、既に警護と手伝いに入っていたサクラが橋に到着していた。

タズナ

「な、なんじゃ!？」

橋に足を踏み入れて、目に飛び込んできた風景は、人が倒れている様子だった。

カカシ

「遂に来たか。（……再不斬!）」

蒼龍

「サクラは、タズナさんの警護。ナルトとサスケは、仮面の子の足止め。先輩は再不斬を。オレは、怪我人を治療してから加わります。」

第20話

再不斬

「待たせたな、カカシ。相変わらず、そのガキを連れて。また、震えてるじゃないか、可哀想に・・・。」

すると、目の前に再不斬の水分身が7体現れた。

サスケ

「武者震い・・・だよ。」

カカシ

「やれ、サスケ。」

にこやかに水分身の抹殺許可が出た瞬間にサスケが再不斬の水分身を倒した。

再不斬

「ほお、水分身を見切ったか。あのガキなかなかやれるようだな。・・・ライバル出現ってとこだな。白。」

白

「そつみたいですね。・・・全くだいした少年ですね。」

再不斬

「だが、先手は打った。・・・行け。」

白

「・・・はい。」

サスケ

「そこのお面！最初の相手は、俺だ！」

白

「君を殺したくは無いのですが、引き下がってはもらえないのでしようね。」

サスケ

「当たり前だろ。」

そして、急激に接近して、クナイと千本での鏖迫り合いになった。

白

「しかし、貴方は、僕のスピードに付いて来れなくなる。・・・
水遁秘術・千殺水翔　！」

そしてサスケは、千本に包囲された。この様子だと逃げられそうも無い。

ナルト

「伏せてサスケ！　風遁・神風　！」

その術で、サスケも白も退避。白の術も消えた。

再不斬

「分かるか？白。このままだと返り討ちだぞ。」

白

「そうですね。……………氷遁秘術・魔鏡氷晶　！！」

そして白は、鏡の中へ入っていった。

カカシ

「（血継限界か……………」

再不斬

「白のあの術が出た限りお前の部下の命は無い。」

蒼龍

「なら、溶かすか。　火遁・大炎弾　！！」

しかし、溶けない。

再不斬

「無駄だ。諦めろ。フッフッフ……………」

蒼龍

「（経験を積ませる為にも勝手にやらせるか。まあ……………何とかなるだろ。）　水遁・波乱万衝　！　水遁・大瀑流　！」

先手必勝と言わんばかりに再不斬を水力で押し流し自分を中心とした大渦に呑み込もうとさせる。しかし、再不斬はそれを回避し、首切り包丁で蒼龍を真つ二つにした。が、

カカシ

「（あれは！雷遁影分身か？！いつのまに……………」

そして、再不斬の右腕は炭になり使い物にならなくなった。

蒼龍

「先輩！いきますよ。」

カカシ

「あ？あ、ああ。」

そして、二人同時に雷遁系のチャクラを掌に集める。そして、

カカシ&蒼龍

「・・・ 対牙雷切 !!!!!!!」

再不斬の右脇腹と左脇腹から突き刺さる名槍。その光景はまるで、死刑のようだった。それに、言葉も出せぬ再不斬は騒音の中、三途の川を渡って逝った。

蒼龍

「（さてと、あいつらはどうなっているかな・・・。）」「

そして、視線はナルト達の方へと向けられた・・・。

第21話

ナルトとサスケの戦況は極めて劣勢を強いられていた。そんな中、サスケは 写輪眼 を。ナルトは 九尾の衣 を自分の物にしていた。

白

「なるほど。これは、中々厄介ですね。」

その時、カカシ&蒼龍VS再不斬が戦っているほうで、騒音が聞こえた。

ナルト

「向こう側。終わったみたいだよ。先生と龍兄が勝ったみたいだね。サスケ、オレ達もそろそろ……。」

サスケ

「ああ、そろそろ……。」「

ナルト&サスケ

「終わらせよう!!」「

白

「同感です。……恨まないでください。」

そう言い終わるか終わらないかの時に、

ナルト

「風遁・真空波！」

サスケ

「火遁・豪火球の術　！！」

と、コンビネーション技で火力倍増した業火が一つの魔鏡を溶かした。

ナルト

「風遁・嵐手刀！」

その手から出された斬撃は、白のお面を割った。

白

「やりますね……。！？！？」

何の前触れも無く、白は声にならない声を上げた。

蒼龍

「結界忍術・絶縁結界　・・・成功。」

白

「・・・何をしたんですか？」

と、蒼龍を睨みつける。

蒼龍

「この結界内と結界外は、完全に隔たれている。云わば無縁。ここで餓死を待つのも良し、又、無謀と知りながらオレと戦うのも良し・・・・どうする？」

白

「何故、僕が貴方に勝てないというのが無謀なのですか？」

その言葉に答えるようにして、何故か自身の仮面をとった。

蒼龍

「残念なことにオレ、神様に溺愛されてるんだよね。お陰で、死にたくても死ねないし……。ホント、地獄でも良いからって思うこともあるよ。」

白

「信じられませんが、貴方は嘘をついていません。一体、何者なんですか？」

それに答える蒼龍。

蒼龍

「ある時は『大友隆』。ある時は『伊達隆之介』。ある時は『江戸川スコット隆起』。ある時は『スピリタス』。ある時は『アクアビット』。ある時は『メタノール』。ある時は『リュウガ』。ある時は『うちはサスケ』。ある時は『蒼龍』。ある時は『うちはリュウ』。ある時は『雪村時竜』。ある時は『リュウ・カーティス』。ある時は『リュウ』。ある時は——で、大神様に貰った名としては『人の神』。という一応、人間なんだ。多分、人間なんだ。恐らく……。」

今、出た名前の数は、軽く50を超えていた。それとイコールという訳ではないが、ほぼそれか若しくはそれ以上の回数の人生を生きたことになる。

白

「あゝえーっと、なんだか大変ですね。」

蒼龍

「分かってもらえると嬉しいよ。・・・そんな君を殺したくは無いんだけど、オレとカカシ君で再不斬を殺しちゃったんだけど、どうする？」

第22話

白

「殺してください。僕には、生きる理由が無くなりました。」

蒼龍

「生きるのに理由は要らないと言われても？」

白

「・・・はい。」

蒼龍

「オレみたいに何度も生き返れないけど？」

白

「・・・はい。」

蒼龍

「あんまり人は、殺したくはないんだけどな。」

白

「ごめんなさい。でも、死に様は、自分で決めたいんです。」

蒼龍

「分かった。・・・多重影分身の術。」

煙と音を立てながら分身あわせて8体になった。

蒼龍（&7体の影分身）

「雷遁秘術・大雷　雷遁秘術・火雷　雷遁秘術・黒雷　雷遁秘術・折雷　雷遁秘術・若雷　雷遁秘術・土雷　雷遁秘術・鳴雷　雷遁秘術・伏雷。」

白を八方から取り囲んだ蒼龍とその影分身は、それぞれ一本ずつの大きな雷柱を中心にいる白に向けた。

蒼龍

「いつか、別の処で会えると思うよ。・・・　雷遁禁秘術・八雷神殺死　！！」

そして、八つの雷が中心で白と共に跡形も無く消え去った。

蒼龍

「ふう・・・。この術、島1つ消せる術なのに何で一人の為に使ったんだろう。」

何故か自分自身に疑問を持った蒼龍。その後、仮面を被り直して、結界を解いた。すると、外の世界では既に休戦モードに入っていた。

カカシ

「終わったか？」

蒼龍

「まあね。あ、ナルト借りるよ。」

カカシ

「ん？ああ構わないぞ。」

蒼龍

「ナルト！ちよつと来い。」

そして、 結界忍術・防音結界 と 結界忍術・防視結界 を張った。

ナルト

「何？」

蒼龍

「楓、呼び出せるか？」

ナルト

「まあ、一旦オレの精神世界に呼び戻して、またここに呼び出すって言う方法ならあるよ。」

蒼龍

「それ頼む。」

そして、暫く経たぬうちに楓が呼び出される。

楓

「何じゃ？」

蒼龍

「ああ、頼みごとなんだけど。楓、九尾の体に戻って。」

楓

「何故、急に？」

蒼龍

「そうだなあ。理由を話せば長くなるから簡潔に話すと、九尾の妖狐の体はナルトを拒んでいて、逆に精神は受け入れている。だから心身を元通りにしたら今よりももっと“ナルトの力になれる”と思うって話。」

この言葉の威力は強烈だった。なんせ、ナルトを溺愛しているのだから。

楓

「今すぐやるのじゃ!!」

蒼龍

「じゃ、精神世界に戻っておいて。（写輪眼！）」

そして、楓が消えたのとほぼ同時に仮面を外した。

ナルト

「龍兄も写輪眼!？」

そう思ったかと思うと、精神世界に着いていた。

蒼龍

「じゃあ、早速始めるよ。心身修復融合の術！」

すると、九尾の妖狐と楓が引き合い本来の姿（心身一体）に戻った。

蒼龍

「（とりあえず、死ぬなよ。もう一人のオレ。）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6402r/>

【番外編】 夢か?前世か?!転生か?!あ、憑依か♪

2011年6月19日17時19分発行